

言上異端狀

管豊前國京都郡雨米事

副進

彼國解文一枚 同國京都○都下恐解文一枚

彌勒寺講師長祐牒狀一枚 雨米一裹○中略

長德五年正月一日

正六位上行大典酒井宿禰

〔百練抄四條〕長保元年三月八日、太宰府進雨米一裹、令諸道勘申、

〔兔園小説七集〕松前大福米

いにしへより仁人義士貞婦孝子の天感によりて、或は米穀或は錢帛の、不慮にその家に涌出せし事、和漢にためし少からねど、正しく國史に載せられしは、書紀天智紀云、三年冬十二月、淡海國言、坂田郡人小竹田身之猪槽水中、自然稻生、○中略これらは遠く見ぬ世の事にて、いと疑はしく思ひしに、近ごろ松前の藩中に、よくこれと似たる事あり、その由來を傳へ聞くに、寛永十七年春二月廿二日、松前の家臣蠣崎主殿友廣の家に、米數升涌き出でけり、是よりして、或は一升或は二升、日々に涌出せずといふことなし、かくてこの年の夏四月下旬に至りて、その事やうやくやみしかば、友廣あやしみ且祝して、大福米と名づけつゝ、主君公廣朝臣に進上して、ことのよしをまうし、かば、人みな驚嘆せざるはなし、主君すなはちその米數斗を受けとらして、一箇の瓶にこれを納め、又その事を略記せしめて、倉廩中に藏め給ひ、その餘の米は、皆ことごとく友廣に取らせ給ひぬ、これより後の世に至り、不慮にその瓶をひらかせて、その米を見給ふに、絶えて蟲ばみ朽つることなく、且遠からずゆくりなき吉事ある事もありけり、かゝりし程に、當主章廣朝臣公廣朝臣より、家督の後、文化四年春三月廿二日、日ゆくりなく松前の采地を召しはなされて、奥の伊達郡

世歟